西鶴と浮世草子

岩崎允胤

目次

Ⅰ　生涯と作品
Ⅱ　西鶴の文学史上の位置
Ⅲ　西鶴文学の世界
Ⅳ　西鶴の世界観・人生観
補論　西鶴とリアリズム

Ⅰ　生涯と作品[1]

西鶴（一六四二―一六九三年）の生涯については不明なことが多い。まず、その名前からして、伊藤梅宇（仁斎の次子）の随筆『見聞談叢』[2]によって平山藤五を本名あるいは公称とする説もあったが、梅宇のこの記事は何かの聞きちがいによるものであろうともいわれ、井原姓がいちおう正しいとみられている。暉峻康隆もいうように、[3]俳人としてしばらく鶴永と号していたが、かれは談林風の俳諧を開いた西山宗因を師とし、その「西」の字をもらって西鶴と名のるようになったようである。森銑三らは、西鶴を、難波の生まれで、商人の子とみているが、[4]これも推測によるもので確かとはいえない。他方、紀州がかれの出自で、武家の血筋をひくという野田壽雄の説、[5]その他がある。ともあれ、かれは大坂で成長し、やがて何かの商業にかかわり（呉服業

にたずさわったとの説もあるが、廻船問屋に奉公し、その経営にあたるようになったのかもしれない）、その間、学問や芸事も身につけたであろう。二十歳頃には大坂で早くも俳諧の点者となっている。いつのころか、商売を手代にゆだねたようである。そして諸国へ旅をした。もっとも、かれの作品に出る多くの地域の描写は必ずしもかれ自身の直接の見聞によるものではないだろう。

延宝元年（一六七三年）、大坂生玉社の神前で、西鶴は三十二歳のとき、同好の士を集め、万句俳諧を催し、その一節を編んで『生玉万句』として刊行した。同三年若くして逝いた妻への手向けに郭公独吟千句を仕上げて、上木した。同五年には、生玉社で矢数俳諧を催し、一日一夜に一千六百句の独吟をおこなった。これは『俳諧大句数』と題してまもなく刊行された。矢数俳諧というのは、三十三間堂の大矢数の形式にまねて、一日一夜あるいは一日のうちに多数の句を独吟して、その句数を競う興行であり、矢数俳諧の名称は生玉社のこの催しによっておこったといわれている。西鶴はその後ときどきこれを試みており、生玉での第二次矢数俳諧は、延宝八年（一六八〇年）に催され、翌年『西鶴大矢数』として、刊行された。このような試みは、速吟によって現実生活の賑やかな多様性を生きいきと描きだすことを、人々の意表を突いてめざしたのであろうが、おびただしい数の句を短時間内に作りあげることは至難な業である。たしかにかれの頭の回転の早さと、表現力の多彩を示すであろうが、作品の質としてはどれも拙い。西鶴自身も、自作にだんだんと嫌気がさし、こんなことをいつまでやっていても仕方がないという思いをもつようになってきたであろう。師の宗因の句に将来的な展望がないことも、しだいに感じてきたのではなかろうか。そして同世代、同じく談林風から出発しながら深川の芭蕉庵に入って新風を探っていた伊賀出身の芭蕉の風評も遠くきき及び、その動向にも注意をよせはじめていたのかもしれない。

当時、仮名草子は、作品としては低俗でつまらないにせよ、さまざまな書肆から出版され、民衆にも受けい

	西　鶴（1642－'93）	芭　蕉（1644－'94）
1680	生玉社にて第二次矢数俳諧	深川の芭蕉庵に
'81		『俳諧次韻』（蕉風の端緒）
'82	『好色一代男』	
'83		『虚栗』（蕉風最初の句集）
'84	『諸艶大鑑』	『冬の日』（新境地の開拓）
	住吉社にて第三次矢数俳諧	
'88	『日本永代蔵』	
'89		奥の細道の旅
'91		『猿蓑』
'92	『世間胸算用』	俳諧七部集（左欄には三集のみあげた）
'93	『西鶴置土産』	
'94	『西鶴織留』	『炭俵』
	遺著	『続猿蓑』編集
'96	『万の文反古』	↓
'98		同出版

れられていたので、西鶴は、自分のありあまるほどの才能を十分に発揮できる新しい仕事を散文の領域に開拓しようと考えついたのであろう。偶然であろうが、ちょうど宗因の逝いたその年、天和二年（一六八二年）に、自筆の挿絵付きの『好色一代男』を世に問うた。これによって西鶴は、一躍、従来の仮名草子と質を異にする新機軸の作品をたずさえて登場することとなった。矢数俳諧で鍛えた多彩な表現力のうえに独特のみごとな文体を仕上げ、新しい文学をかれはここに創始した。こうして、のちに「浮世草子」とよばれる小説のジャンルが出現したのである。*

＊　西鶴は、一六八四年には住吉社で第三次矢数俳諧を催し、一昼夜に二万三千五百句という驚異的な独吟をし、人々を驚かせた。これは「世界記録」といわれるが、かれの文学的才能は、このような速吟によってではなく、浮世草子を創作することによって発揮されることとなった。かれは次のような自嘲の句も残している、「射て見たが何の根もない大矢数」。

『好色一代男』以降の、西鶴の生前における主要な文学作品をあげよう。『諸艶大鑑』（一六八四年）、『好色五人女』『好色一代女』『本朝二十不孝』（一六八六年）、『武道伝来記』（一六八七年）、『日本永代蔵』『武家義理物語』（一六八八年）、『世間胸算用』（一六九二年）などの好色物、武家物、町人物である。

西鶴は、一六九三年（元禄六年）五十二歳で没した。北条団水ら弟子の手で出版された主要な文学作品は次のようである。『西鶴置土産』（一六九三年）、『西鶴織留』（一六九四年）、『万の文反古』（一六九六年）など。

四十四歳のとき浄瑠璃『暦』および『凱陣八島』を宇治加賀掾のために製作したといわれる。しかし、興行の入りが悪かったので、二作だけで手を引いたようである。五十一歳のとき、紀州熊野神社へ参詣し、その記念に『自註独吟百韻』の壮麗な絵巻を、紀州藩主徳川光貞に献上する意図をもって作製した（これは克明な狩野派の画とのことである）。野田はこのことを西鶴と紀州との関係を証明する一つの根拠としている。[6]

西鶴作として一応伝わっているもののなかには、『眞実伊勢物語』や『小夜嵐物語』などのように偽作であることが明らかなものも含まれている。また、右にあげたかれの遺著のうちには弟子の止むをえない加筆部分も当然あるだろう。ともあれ、生前の主要な著作として右にあげた諸作品は、ほぼ西鶴の真作であろうとわたくしは一応考えておきたい。しかし、森銑三『井原西鶴』（一九五八年）は『好色一代男』以外は西鶴の真作ではないと強く主張する。氏は次のように書く、「従来の『諸艶大鑑』が『一代男』につぐ西鶴の浮世草子の第二作で、以下第三・第四作と、相ついで刊行せられたかのように解せられていた。続々刊行せられたのは事実であるけれども、それらは西鶴の真正作品とは称すべからざるものである。直接・間接に、多少の関与をしたにもせよ、それらは単独に西鶴一人の手で成ったものではない。『一代男』は紛れもない西鶴の作品であるが、『諸艶大鑑』以下は西鶴関与作品とすべきである。[7]」

森銑三の所説にたいし（ただし、いま述べた著作ではなく、一九七一年の氏の論文「私の西鶴研究のこれま

で」――『西鶴本叢考』所収――における諸説にたいし）、野田壽雄は批判的検討をおこなっている。その結論的部分のみを次にしるす。「西鶴作を『好色一代男』のみに限定するというのは、行き過ぎの感がある。」「大体の小説作品を西鶴作としていいのであるが、疑問作もある。明らかに西鶴作でないのは、『眞実伊勢物語』『小夜嵐物語』であるが、『色里三所世帯』も、書誌から言って疑問のある作である。……また『懐硯』も代作ではないかという感がするのであるが、これは文体から言うのであって、もし文体からのみ言うならば、『好色一代女』や『新可笑記』なども存疑の作となる。[*8]」

＊　暉峻康隆・野間光辰編著『西鶴』（三省堂、一九六二年）は次のようにいう。「彼〔森〕の所論は発表するごとにはげしくなり、『好色一代男』一作のみが西鶴の作であり、他はすべて非西鶴である。団水・西鷺などの助作者があり、西鶴は編纂者の位置にあったにすぎない、というのが結論であった。……大胆に〔『一代男』以外の〕すべての西鶴本の作者を疑った森の論文は、それ自身に学的価値は認められなかったとしても、学界にある刺激を与えたことは事実である。従来、やや等閑視された、個々の作品の成立過程に関する考察が深くなされるようになった」云々。[9]

西鶴が売れっ子になると、版元もしきりに出版を慫慂（しょうよう）する。こうなると、頭の廻りと筆の運びのいかに早い西鶴とてもたいへんなことで、かれの周りに、団水ら弟子たちを中心に素材の収集や文章の下書きなどの手伝いなどをする一種のグループのようなものが、あるいはできたかもしれない。かなり弟子に依存するところの多い作品もなかにはあったかもしれない。ともあれ、森銑三のいうように『一代男』以外はたんに西鶴関与作品にすぎぬという根拠は乏しい。弟子の手伝いがあったにしても、西鶴はできるだけ全面的にこれを自作として仕上げるために努力を払ったものと思われる。

Ⅱ　西鶴の文学史上の位置

中世の御伽草子の伝統をうけつぎ、江戸初頭からの仮名草子を経て、西鶴によって本格的な近世小説としての浮世草子が誕生した。

西鶴も、芭蕉も、談林風俳諧から出発したので、ここで俳諧について一言しておけば、『新増犬筑波集』によって連歌の世界のなかから言語表現の面白さをかかげる文芸の民衆的な一ジャンルとしての俳諧を確立したのが、松永貞徳（一五七一－一六五三年）であり（その俳風を貞門風という）、これにたいして、西山宗因（一六〇五－一六八二年）を中心として、自由溌剌として、風俗詩的で奇抜な見立てをもち、新興庶民によって受けいれられやすい談林風俳諧がうまれたのであった。

談林風俳諧のなかから、その手法にあきたらなくなった西鶴と芭蕉は、それぞれ独立に相互にまったく異なる質の文学の創造に向かった。次に、西鶴の仕事の江戸文学のなかでの位置について――ただし時期的には本書の後編にぞくする（すなわち江戸の後半期にあたる）こともでてくるが――簡単に述べておきたい。

西鶴の没後、弟子たちによって遺稿が次々と出版されたことは前述したが、西鶴を模倣し、その影響をもろに受けながら、文化時評的な傾向をもつ都の錦（『元禄太平記』）や錦文流（『棠大門屋敷』）などを経て、元禄の末頃から正徳頃にかけて八文字屋から江島其磧（一六六六－一七三五年、西鶴の弟子）の『傾城色三味線』『傾城禁短気』『世間子息気質』『世間娘気質』などが出版され、好評をえた。「西鶴に始まる浮世草子が、〔一連の〕文字屋本に及んで、ようやく普及の時代を迎え、大衆化・商品化され広範な読者層を獲得するに至った」[10]といわれる。

宝暦になると、江戸の文運は、静観房好阿の『当世下手談義』の刊行（一七五二年）を機に興隆に向かっ

た。八文字屋と其磧の上手談義にたいしては自分のは下手談義でもあろうとしながらも、江戸当世の風物の描出をおこなうなかでわれもまたいささか教化の志をもとうというのである。作者好阿は京都の僧侶で、諸国を行脚し、たまたまわずか二年間ほど江戸に遊び、町人の活力にあふれる新風俗をつぶさにみて、江戸の新鮮な言葉であざやかに綴ったのであり、現実感と滑稽味によって好評を博した。かれもかなりの才人であったろう。こうして江戸で浮世草子に替って、いかにも江戸的な談義本が江戸庶民によって自分らの文学として迎えられ、大いに興隆することとなった。

同じ宝暦期に好阿の談義本の延長線上に早くも現われた二つの傑作が、平賀源内（一七二八－一七七九年）三十六歳の作『根南志具佐』と『風流志道軒伝』である。源内、号して風来山人は、自由奔放、多芸多才、しかも好奇心と奇才に富み、庶民感覚豊かな、稀代の天才であったといえよう。かれは蘭学などをしこしこと勉強してなどいられない性分だが、杉田玄白とも親しく、蘭書「和解」の必要をともどもに語り、また物産会を催し、西洋の博物書の蒐集にも努めた。平秩東作や、蜀山人・四方の赤良こと、太田南畝との交友も知られる。もしこの期の自由人を語ろうとすれば、数あるなかでかれ風来山人こそがその筆頭を飾るにふさわしい多彩な才をもつ人物とすべきかもしれない。しかしわたくしはすでに同じく自由人である司馬江漢について長い一文を草しており、源内について本書で改めて書く紙幅が残っていないことを遺憾としなければならない。

ところで、源内の上記二作は、奇想天外な構想をもち、奇抜な連想がはっしはっしと飛び交い、現実の世を活写しつつも、滑稽で諷刺に富み、世相批判が冴えてきびしい。

野田壽雄は『風流志道軒伝』中の次の一文にとくに注目し、そこに源内らしい人生観をみている。「人の浮世にまじはることは、只銭湯に入（る）がごとし。穢し中へはいる事は、其穢を請（け）ん爲にあらず、けがれを以て穢を落し、〔銭湯で〕掛湯〔あがり湯〕をして出（で）たる時、我（が）身はいつも清浄なり。此理

を以て世に交らば、我側に袒裼裸衽す〔肩を脱ぎ裸になる〕とも、何ぞ我をけがさんや。[11]」この一文について氏は書く、「『けがれを以てけがれを落す』、つまり、卑俗の中に交じっても卑俗にはならない。むしろ卑俗に交じってこそ自己を清浄にすることができるという論理で、一種の経験主義的達観論とでも言うべき論理である。この論理は、当時の儒学が卑俗を軽蔑し、あるいは無視して、空理空論の観念論を振り廻していることに対する反発であったと言ってもよい。すべてを見聞きし知り悉した上で、それを批判できる自分を確立する。それが本当の学問だといいたいのである。志道軒を日本および世界のあらゆる事を見聞きし経験した上での批判的談義者であったと仕立てたのも、そういう源内自身の人生観を基底にして立てた構想であったとすることができよう。[12]」

『志道軒伝』では、主人公浅之進は、風来仙人から羽扇を授かり、それにのって海の彼方の異形異風の国々を遍歴することになるが、そのなかには「大人国」や「小人国」も出る。イギリスのスウィフトの『ガリバー旅行記』は源内のこの小説よりも三十数年前に書かれているが、同じ十八世紀に東西遠く距てて同じような着想が抱かれたことは、はなはだおもしろい。

源内の談義本の系列で、明和を経て安永期には、遊谷子の『和荘兵衛』が書かれる。和荘とは、呵々と笑って日本製の荘子といいたいのであろう。『荘子』の斉物論の故蝶の夢さながらにめずらしい国々を遍歴して、大人国ではじめて自己の小智を知るという構想であり、のちに曲亭馬琴（一七六七－一八四八年）の『夢想兵衛胡蝶物語』がこれから生まれる。また、天明期には、笑止亭による『笑註烈子』や、作者不明の『東唐細見噺』がある。前者は、金持の商人烈子山人がめずらしい諸国をめぐる夢話で教訓的（儒教的）であり、後者はやはり異国遍歴物で諷刺もぴりっと利いている。こうしてみると江戸期にもなかなかの想像力をもつ愉快な作家がいたものと思う。これらの作品がわれわれの今日手にとりやすいかたちの活字本になっていな

いのは、はなはだ残念である。

西鶴にはじまる江戸期の近世小説の流れは、これら談義本のあと読本（よみほん）（秋成、京伝、馬琴ら）にひきつがれることになる。[13]

西鶴の浮世草子は江戸の後半期にはせいぜい風俗資料としてとりあげられるにとどまり、文学的作品としては評価されなかった。明治になって、尾崎紅葉や幸田露伴によってすぐれた文学的意義が認められた。樋口一葉も西鶴から大きな影響をうけたし、内田魯庵や上田敏のような外国文学者も西鶴の愛好者となった。暉峻康隆・野間光辰編著『西鶴』（三省堂）は、西鶴が近・現代の日本文学に与えた影響について概観するのに重要な参考文献である。

Ⅲ　西鶴文学の世界

次に、西鶴の代表的な作品のなかからその文学世界をいささかのぞきみることとしよう。*

ただし、西鶴文学の世界に入る前提として、近著、宮地正人『幕末維新期の文化と情報』によって、江戸期における公娼の成立についてみておく。「江戸幕府は、近世初頭、江戸・京都・大坂の三直轄都市において、それまで市中に散在していた売春婦達を、外界から離され、また外出不可能な特定な空間に押し込めた。江戸の吉原、京都の島原、大坂の新町の三遊廓がそれである。そして、妓楼経営者群に対しては営業の独占権を与えるとともに、市中の私娼を摘発し、告訴する特権を賦与したのである。[14]」

では、なぜそのような遊廓囲い込みができたのか。これまで、治安維持（女をめぐる喧嘩の多発から城下町の安寧を守る）や武士社会の綱紀の粛正などがその原因としてあげられていたが、宮地は、それだけの理由で

はないであろうとし、幕末期の資料などの検討によって、悪所とされる「無法」空間としての遊廓の設立は、幕府の都市政策の全体のなかで基幹的なものの一つとみるべきであり、さまざまな犯罪者や不審者にかんする、のみならずまた、大名・旗本・武士の動向などにかんする、種々の情報をキャッチすることに狙いがあったとする。そのため幕閣への情報提供の義務が遊廓経営の当主に課せられるようになったのであり、経営者は、それを引換えに遊客から多額の利得を独占的に取得することができた。政治権力と妓楼経営者との結託は設立当初からあり、幕府はますます――開港後には外国人についても――これを大いに利用した。廓はこのような政治的世界のなかで成立していたのである。[15]

武士階級の動向キャッチの点については、幕府の所在地江戸の吉原がとくに重要な役割を果たしたであろう。「市中の『風説』を最も容易に把握しうる地区こそ、その性的放縦性と酩酊性により、噂と風説と流言が凝縮した形で日夜横行する吉原という遊廓であったのである。その意味では、吉原を『噂空間』とよぶことも可能なのである。[16]」

それゆえ、遊廓は、日本の幕藩体制に特有な前近代的な制度であった。そして、このことは、江戸から明治・大正・昭和へと連なる日本文学の独特な一面を基本的に特徴づけたのであった。

本書でわたくしは、主として、キリシタン、漢学、国学、蘭学（洋学）とそれらの思想について考察し、文学についてはただこの元禄時代にかんして述べるにとどまる。そしてまず西鶴をとりあげるが、西鶴の好色物、とくに遊里についての浮世草子は、明治の尾崎紅葉以降の日本文学にも一定の影響を及ぼしたということがある。そのこともあって、わたくしはここで、江戸時代の民衆生活の一端をみておくために、西鶴の好色物についてやや立ちいりすぎるかと思われるほど関わることになろう。ただし、わたくしとしては、遊里というものの存在と遊里の文学にたいしてはあまり肯定的ではなく、またとくに興味が深いわけでもない。

1　遊里のかもす妖しい美

いわゆる元禄文化を象徴する一つは、何といっても遊里の美的世界であり、それを主題として描いたのが『好色一代男』である。当時、新興町人たる俄大尽たちは、溢れるほどの銀をもって遊里を訪ね、ほのかで艶やかな紅燈の境に美と愛欲の戯れを求めていた。大坂で一端の商人となった西鶴は、早くから趣味芸事を身につけ、俳諧の点者にもなり、やがておのずと遊里に足を向けたことであろう。太鼓持とも仲よくなり遊里の境を裏まで知るようになったのかもしれない。しかし、すでに大坂の談林風俳諧に見切りをつけていたかれは、遊里での放蕩に溺れることもなく、むしろ冷静な眼でそこでの諸相を観察することに努め、自分のこのなまの体験を基礎に、散文によって新しい美的世界を構築する道をきりひらいた。こうして『好色一代男』をはじめとし浮世草子好色物の作品が次々とうまれた。

①　『好色一代男』

日本近世文学の烽火となったのが、『好色一代男』である。この作品の主人公世之介は、小さいときから殊の外早熟であり、人並外れてまだ若い頃から昼も夜も色事にふける放埒な生活を送ったあげく、十九歳で勘当の身となった。そのため「火の降る」ような赤貧の生活をよぎなくされたが、それでも「明暮只も居られず〔がまんもならず〕」、ただただ女を求め色恋に浮身をやつす日々がつづいた。三十四歳のとき、父の死によって実家に呼びもどされ、二万五千貫目の財産を跡目として貰いうけ、またとない大尽となった。ここまでが『一代男』の前半（巻一－巻四）で、以下後半（巻五－巻八）、世之介は、にわかに降って湧いたこの大金を惜しみなく使い、最高の遊女（太夫）たちと美と粋の頂をきわめる愛欲の遊びを次々とくりひろげた。やがて還暦を迎え、手許にある財宝を投げ棄て、残った金子六千両を東山の奥深くに埋め、「抓みどりの女」のたくさ

んいるという「女護の島」に行ってみようと、心を同じうする友人たちを誘い、好色丸に乗って、恋風にまかせ、伊豆の国から行方も知れず舟出していった。これが主人公好色の一代である。

野田壽雄は、『一代男』の前半を「粋の修業時代」（野暮から粋へ）、後半を（最終章を除き）「粋の実行時代」、また最終章を「粋の雄飛時代」と、それぞれ特徴づけ、この作品の重点をなすとみられるこの後半部について、「そこにおいて西鶴は縦横に名妓を登場させて豪華絢爛の舞台を現出せしめようとしたのであったろう」という。そして巻五、冒頭の文章、「都をば花なき里になしにけり。吉野は死出の山にうつして、とある人の読めり。〔吉野とは〕なき跡まで名を残せし太夫、前代未聞の遊女なり」という一文を引用し、ここは、元和・寛永期に才色兼備の名妓とうたわれた京島原の二代吉野太夫のいよいよ登場する舞台であり、さながらその「豪華な緞帳がするすると上ってゆくという感じである」と書いている。[17] まったく同感であり、この幕開けは見事で美しい。なお、「都をば花なき里になしにけり」云々の歌は、吉野を妻とした佐野紹益の作で、いうまでもなく、花のように美しい名妓吉野太夫を、桜花の咲き匂うかの大和の名所、吉野の山にかけてうたったものである。

② 遊里と名立たる遊女たち

『好色一代男』巻六の六「匂ひはかづけ物〔くだされ物〕」の冒頭に、「京の女郎に江戸の張をもたせ、大坂の揚屋であはば〔お目当てのそういう太夫に、逢うとすれば〕、この上何かあるべし」とある。揚屋というのは、遊廓で客が遊女を招いて遊興する家で、揚屋に招かれるのは高級の遊女のみであった（『日本史用語辞典』柏書房）。江戸吉原の遊女は、土地柄、張りつまり意気地の強いのが特色で、もし、優雅で美しい京の島原の女郎に、江戸吉原の女郎のような張りをもたせて、大坂新町の豪華な揚屋で逢うことができるとしたら、これ

にまさる結構なことはまたとあるまい、というのである。野田は、この句について、「上品で情愛の深い京都、意地と誇りの江戸、そして金銀の大坂、この三都の特色が、また遊女にも反映し、その総合において西鶴のめざす美は完成されるのである」と書く。『一代男』後半は、こうして、まず冒頭に吉野の讃美に始まり、島原の三笠、新町の夕霧から、吉原の小紫にいたるかずかずの名立たる遊女たちの美と粋を次々と描いてゆくのである。まさに「華やかな絵巻物」が繰りひろげられるかのようである。[18]『一代男』の刊行されたのが天和二年（一六八二年）であり、それより前の太夫たち十数名、すなわち、天和の頃から、年代を逆に、延宝（七三－八一年）を経て、明暦・万治・寛文（一六五五－七三年）、さらに遠く元和・寛永（一六一五－四四年）の頃にまでも遡る。各章は決して年代順に書かれているわけではないが、このように、明暦の大火後新吉原*が開かれて以後の、万治・寛文（そしてやや衰えをみせる延宝）の時期の遊里のことが殆どを占めているといえよう。この「万治寛文時代というのは遊里の最盛期であって、あらゆる格式もこの時に成立し、近世遊里の美を誇ったものであった」。「……世之介物語もそういう背景と雰囲気が脳裏に浮かんで書き綴られたものに相違ない」[19]といわれる。

＊　江戸に吉原が公許のもとにつくられたのが元和三年（一六一七年）、そして明暦の大火で全焼したので、新吉原が隅田川畔の日本堤に開かれたのが明暦三年（一六五七年）である。なお、いわゆる元吉原が認許された場所（葺屋町）には葭茅が茂っていたので葭原と名づけられたが、縁起をかついで吉原と書くようになったという。[20]

③　粋と美

大野晋他編『岩波・古語辞典』補訂版は、「いき」*について次のように書いている。「近世中期頃から江戸の町人に主に発達した美意識の一。嫌味なくさっぱりした態度、垢抜けした色気、洗練された媚態などを意味し

た。」遊里ではそれが特有な条件のもとで、いかにも遊里らしい仕方でいっそう洗練された独特な美意識となった。ここでは「わけしり」であることが要件となる。同辞典は「わけしり」を次のように説明している。「男女の情をよく心得ている人、特に、遊里や遊女の事情を知り尽くしている人、粋人、通人。」これにたいし、「やぼ」とは「世情に通ぜず、無智で泥くさいこと。特に、遊里の事情に通じないこと。また、その人」をいう。つまり、やぼは、遊里独特の雰囲気のなかでの間抜けをいう。

＊　粋は意気から転じた。

『好色一代男』では、主人公は「わけ知りの世之介様」として吉野の前に登場し、早々とこの名妓を請け出して正妻とした。――ところで、それより先、『一代男』の前半（巻一から巻四）中では、巻四の六「目に三月」、石州と名のる太夫への、わけしりの男性としての善吉のみごとな捌きの場がとくに出色である。たまたま揚屋の店先きで石州が善吉を見かけて禿を介して盃を差し出すと、その盃を善吉は咄嗟に受けて気の利いた仕草で返し、挟箱から黒壇の接棹、六筋懸の三味線をとりだし、巧みに奏でるその音色に乗せて弄斎の一節を僕が美しい声で歌う。これは、さすがは石州の見立て、善吉の味のある捌きであるぞと、並み居る者はみな感じいる件である。その日、まだ色事の修業の足りぬ世之介は鹿恋女郎にさえ振られ、「この口惜しさ、人に買ってもらって〔つまり他人の金を当てにして〕遊ぶべき所にあらず。おれも一度は、なか〳〵これでは果てじ〔どうしてどうして、こんなみじめなことで終わってたまるものか〕とぞおもふ」（一九六ページ）。ところが、不幸にも世之介は父を失い、そのためかえって幸にもといおうか、莫大な遺産がかれの懐に流れこむことになった。こうして『一代男』の前半が終わり、後半、前述したように、巻五の一、華麗な緞帳が上がって花魁吉野の登場となる。石州と善吉の捌きのみごとさと、逆に世之介の振られるみじめさとは、花の吉野太夫

とともに新たにわけしりとしての億万長者世之介が颯爽と登場するための前曲となるのである。

以下では、まず遊里での遊女の粋、遊興の粋の様をみよう。

(i) 遊女の粋と美

巻六の二「身は火にくばるとも」は、新町の太夫夕霧の舞台である。幕がするすると開けば、次の場景がひらける。「〔大坂〕生玉の〔み社の〕御池の蓮葉、毎年七月十一日にかる事ありて、汀に小舟をうかめ、鎌の刃音におどろく鮭・鮒・泥亀のさわぎ、鳰鳥を追いまはし、罪も神前も忘れ果てておもしろや。」その池のほとりの出店に坐をとった世之介らが口をそろえてほめるのは新町の夕霧である。この太夫は、姿形しとやかに、情が深く、色事も心得、唄、琴・三味線はもとより、文章も上品で教養豊か、一座の捌きにそつがなく、恋の駆引きの名手、女郎の鑑とたたえられていた。その太夫のもとに世之介は、恋がかなうまではと、雨の夜、風の夜、雪の道をもいとわず通いつめ、ついに廓の多忙な歳末の日に、夕霧から、今日こそ忍んでくるようにとの内証の知らせをもらった。夕霧は揚屋で待っていてくれて、世之介は一緒に小座敷に入って、積る思いを語っていると、何を思ったのか夕霧は炬燵の火を女中に消させた。寒さがきびしいというのにどうしたことかと世之介は不思議に思いながらも、夕霧とふざけあって楽しんでいるところに、廓の者がその日のおてき（お客）「權七様おいで」と呼び継いできた。夕霧は少しもあわてず、炬燵の下に世之介をかくしたので、かれはそのゆきとどいた心遣いに感謝し、たとえここで焼け死んでも構わないと思うのであった。夕霧は權七がやっかむように、なんでもない手紙をわざと手にとって台所へ逃げていったので、男は追っかける。そちらで、見せろ見せないといい争っているうちに、世之介は裏からそっと逃げてでた。恋の抜け道がちゃんと用意してあった、という話である。

また、『一代男』巻七の一「その面影は雪むかし〔昔の初雪の朝茶〕」では、島原の初代高橋太夫が登場する。初雪の朝、太夫は茶の湯を思いたち、世之介を正客とし、揚屋の二階座敷を屏風でかこって茶室に仕立て、白紙を表具した掛物をかける。高橋は墨をすって、即興の俳諧を望み、めいめいが筆をとって連句をその掛物に書きこむ。中立てのあと、賑やかな獅子踊の三味線の音にあわせ茶室に入ると、竹の筒に花が生けてない。まさに「けふは太夫様方のつき合い、花はこれにまさるべしや」という趣向である。高橋の美麗な水際立った身づくろい、その風情のあでやかさ、「天津乙女の妹などとこれをいふべし」とたたえられる。どんな生花にもまさる花の美しさである。やがて、乱れ酒となり、世之介が酔った勢で、紙入れから金貨銀貨を両手で鷹揚にすくいあげ、「太夫戴け」という。廓の仕来たりでは上級の妓は直接客から金子を戴くものではないことになっている。初心の女郎たちは赤面して困っているなか、高橋はすかさず、しとやかな微笑みを浮べ、「いかにも戴きます」と、傍の丸盆をさしだしてこれにはっしと請け、「今目の前にいただくも、内証にて状で〔手紙で無心して〕戴くも同じ事」という。捌きの「その見事さ、いつの世か又あるべし」。

こうして、楽しい一日もようやく暮れ惜しむ頃、別の部屋から尾張のお客が待っている、とのせわしい使いがやってくる。勤めの身の悲しさに高橋は涙ぐみながら、それでもお客の座敷に行こうとしない。世之介も、行くようにいさめるが、高橋は「『いかにも覚悟』」と世之介に〔三味線を〕引かせて〔自分は〕膝枕して、『さても命は〔あるものを〕』と投節を歌いはじめた。怒った尾張の大尽は、やってきて、刀を抜いて斬りかかったが、目もやらず、まして声をふるわせて歌いつづけた。両揚屋や町役人もやって来て入り乱れるなか、高橋の親方が駆けつけ、「今日は尾張のお客へも世之介へも〔太夫を〕売らぬ」といって、女の髻をつかんで引ったてた。それにも屈せず、「世之介様さらば」と別れの言葉をかけて去るまことに気丈な女、それこそ高橋の真骨頂であった。

(ii) 遊里の粋と美

「新町の夕暮島原の曙」と聞けば、粋客はいてもたってもいられず、胸のわくわくするのをどうすることもできなかったであろう。ありあまる金子を手に、思うがままにその遊楽を地で行ったのが世之介であった。『一代男』巻七の七、「新町の夕暮島原の曙」では、折しも九月九日菊の節句の紋日を中日として前後の三日間、太夫や天神は、座敷に小袖・文庫・硯箱など高価で珍しい持ち物を飾って全盛を競うのだった。色里のこの衣装重ねの行事を見物するのは命の洗濯というもの、世之介も大坂の新町に胸躍らせてでかけた。きようしもぞ、名にし負う新町の華やぎ、――「ただぬれつつぞ山水の、香りもふかき菊の節句の暮げしき、ここにきて鶯の太兵衛が〔の〕軒端に簾を懸けさせ、〔その簾越しに〕姿をほのかに〔ちらつかせ〕、名をしらぬ鹿恋さへ、これはと心うごかすは、よき日〔この吉日を〕みるゆゑぞかし。ましてや〔太夫〕高間すぐれてうつくしく、新艘引きて〔初めて勤めに出る女郎たちを引き連れて〕千里も行くも遠からず。これや〔栄華物語にもたたえられ、謡曲・邯鄲に謡われる〕寂光の都……」。

その日世之介は扇屋で太夫と遭っていたが、二道かけた浮気心から京の島原が何とも恋しくなり、ここの太夫をほったらかして、道頓堀に出て、四人肩の廓通いの忍び駕籠をやとい、早朝には島原に着いた。

「この朝詠めのおもしろさ、西行は何しつて松島の曙・蚶潟のゆふべを誉めつるぞ。きのふは新町の暮を見捨て、その目をすぐにけふ島原の朝明け、これが唐にもあるべきや」。太夫高橋（二代目）に早速連絡の使いを出すと、太夫からは専属の引舟女郎たちの豪勢な迎えがやってきた。尽間ゆっくり休息をとり、暮れ方から表に床几を据えさせて菊の節句の後宴を楽しんだ。傍には太夫高橋・野風、その他、天神、鹿恋が花のごとく連なる。そこを通りかかる太夫たち、なかでも太夫唐土を笑わせ、薫からはつややかな色目をつかわれ、奥州には分かってますよと流し目でうなずかせるなど、互いに、好しみを通じあった過ぎし日を偲び、また思いを

残すことでもあった。夜も更けて、太夫の三つ蒲団が敷かれ、並のものではない枕がおかれた。かくして「やさしきおことばを聞寝入にして、結構な夢をみる事ぞかし。」

西鶴は、囲み込まれた空間としての遊里での遊びの「理想」として、このように美と粋の世界を次々と描きあげていったのである。

④ 遊女のまことの愛

遊女は勤めの身、色好みでなくてはすごせないかもしれない。だがむしろ、じつはそうなるように強いられており、教養豊かな太夫、天神などの場合とちがって、とくに貧しく落ちぶれた女郎などともなれば、かなしく苦しい日々のみが果てしなくつづくのだった。『好色一代男』よりも少しあとの作品で、華やぐ太夫たちの話とはうってかわって、『好色一代女』巻一の結びには、「男嫌ひをするは、人もてはやしてはやる時こそ。〔お客がいなくなって〕淋しくなりては、人手代〔雇人〕、鉦たたき〔歌念仏〕、短足、呰〔みつくち〕にかぎらず〔だれであろうと〕〔声をかけてもらって〕、あふをうれしく、おもへば世にこの道の勤め程かなしきはなし」とある（差別語が出るが、当時の用語をそのままましるした）。

遊女のなかには、さまざまな境遇から、とくに生活の窮乏のために（たとえば豊臣方の零落、その後の社会の激動によって一家が社会の最底辺にまで落ちこんで）どん底の姿となった気の毒な者も少くはなかった。とにかくいずこであれ、遊里にはいつわりもあろう。恋のかけひきもあろう。華やいでみえる名高たる遊廓でさえも、髪や爪をわざわざひとから買ってまでして客に贈り、客の気を引きとめようとするなど、「心中立て」の安売りをする妓もあった。「心中立て」とは、遊女が起請文を書いたり、経文を書き写したり、日記をつけたり、手紙を書いたりして、男への愛情の誠実さを示すことをいう）。そして、低俗な遊女の場合はいっそう、

来る日も来る日も、訪れる客に媚を売り心なくも肌を許さねばならない。しかしかの女らに、はたして一片の真実もありえなかったのか。もともとまともである人間が、たとえ不幸な境遇のためとはいえ、その涙のなかに一切の真実を失って生きてゆけるか。

＊『置土産』の「序」にもあるように、「世界の偽かたまって、〔粋という〕一つの美遊となれり。これをおもふに、眞言をかたり揚屋に一日は暮しがたし。女郎はないことをいへるを商売、男は金銀を費やしながら気のつきぬる〔うんざりする〕かざりごと」云々。遊里は所詮、嘘・偽のうえに、約束のうえに構築された美遊、飾り事、粋だ、と西鶴はいうのである。

しかし、遊女には遊女なりの心意気（意気地）、心の張りがあり、誇りもあったはずである。じっさい西鶴はそういう気骨のある女性たちをたくさん描いている。たとえば、(1)『一代男の』巻六の一「喰ひさして〔食べかけて〕袖の橘〔遊女が世之介の袖にいれた蜜柑〕」における、島原の太夫三笠である。かの女は、世之介とのひそかな逢う瀬をとがめられ、丸裸にされて庭の柳にくくりつけられて、抱え主に折檻されてもめげず、まことの愛をつらぬくため、あえて縄目にかかって舌を噛みきろうとさえする。「かかる心底又あるまじ〔こんなみごとな心中立てはまたとあるまい〕」と西鶴はいう。情があって張りが強いのは粋の条件である。また、(2)遺稿『万の文反古』巻五の三「御恨みを伝へまゐらせ候」では、遊女でありながらできるかぎりの愛を捧げている客から、遊女としての立つ瀬のなくなるようなことで責めたてられて、次のような文（手紙）を寄せる太夫。「今更なげき申す事にはあらず候へども、あまりなる御仕方、むごいとも、つらいとも、恨みありとも、御無理とも、わけては〔とりわけては〕申しがたく、とかく〔とにかく〕泪に筆はそめしが、手もふるひ、文さへかかれぬ〔ほど〕に候。もっとも〔遊女の〕勤めは皆偽りの身に〔偽りの身だということに〕さだめ置きてから〔きまっておりますとはいっても〕、それもことによるべし。〔とてもがまんできません。こうなったか

らには〕近うとって〔てっとりばやく〕命をすつるより外なく候。神ぞ〳〵〔必ず必ず〕死にかねぬ女に候。」そして剃刀を手に死を覚悟し、「ただひとり行く〔冥土〕夢路の旅、脇道のない所にて、いつまでなりとも相まち候」。女郎でありながら真実に生きようとする必死の思いがここには切々と綴られている。また、(3)『西鶴置土産』巻二の二「人には棒振虫〔ぼうふら〕同前に思はれ」では、上野の山の桜が冬の初めに狂い咲きして、三人の町人が池の端に出て金魚屋に入ると、身なりの卑しい男が金魚の餌にするぼうふらを売りにきた。わずか二十五文を受けとったその男をよくみると、かつて日本橋問屋街の大尽のみずぼらしくかわり果てた姿であった。男は、女郎買いをしたあげくこんな姿になったが、茶碗茶一杯さしあげようと三人を茶屋に誘って、さっきの代金二十五文をそっくり投げ出した。男は、吉原の吉州という太夫のために落ちぶれたが、「傾城も誠」があって――「傾城に誠なしと世人申せども、それは皆ひが事」（近松『冥土の飛脚』）――子供が「とと様（父）さまかかさま（母様）」というのをせめてもの生き甲斐としてこれまで生きてきた。そして友人らをわが家に誘うことになるが、お茶を湧かす薪すらなく、女房が、こわれた仏壇の扉を打ち割って焚いた。息子は大きな溝に落ちてびしょぬれになったが、着替えひとつなく、素っ裸でふるえている。「あるじも女も随分心づよかりしが、今は前後を覚えずなみだになりぬ。いづれも〔だれひとりとして〕しばしは物もいはれず。」三人はその家を出るとき、そっと大型の茶碗にいくばくかの金子をいれたが、後から亭主が追ってきて「筋なき金もらふべき子細なし」といって投げすてて帰った。あとでその金を女房に届けさせたところ、夫婦はもうその伏屋をひきはらって、いずこかに姿を消してしまった。みすぼらしい身の上を恥じたのであろう。悲しい運命のなかで、身請けをしてくれた男とともに誠実に生きる元の太夫、その底のないほどの悲しみと、人間の真実とが、深く読者に訴えてくる。

⑤ 絢爛と虚構（廓の世界）

『好色一代女』の巻二の一には、色街での遊びがいかに高くつくかが書かれている。だいたい傾城買いは、分に過ぎたことをしがちなものである。銀五百貫目以上の融通のきく人は、太夫を買ってもよいだろう。二百貫目までの人は天神を買っても結構である。五十貫目までの人は鹿恋が相当だろう。しかし、その銀を働かさないで徒食している人には、こんな遊び事は思いもよらない話である。だのに近頃の世の中をみると、遊里通いをして半年ともたないような人までが無分別にものぼせあがり、二割三割の高利貸にとうとう追い倒され、はては主人や親類にまで迷惑をかけている。

いうまでもなく、銀あってはじめて粋にもなれる遊里、銀がなければてんで遊べぬ世界。これに泥み、いちずに入りびたれば、ついには身を亡ぼすことになるのが、必定である。世之介のように還暦になるまで遊びに遊んで、なお残る金銀財宝を地中に埋め、好色丸で別世界に女を求めて揚々と舟出するとは、これは「浮世草子」のなかでの作り話にすぎない。そういうありえないような話を西鶴は話として作ったのである。だが、そこまでゆかぬとも、とかくたわけた男どもは、身を亡ぼすことにもなる危険をおかして、高嶺の花である名妓とともに、ひとときの妖しい美と、酒と性との不思議な夢の世界をつくりあげようとする。そこでは、とにかく、三味線などの煽情的な音曲が奏でられ、『源氏』や『伊勢』の夢のような恋の物語や、和歌・俳諧の風雅が心をそそる。こうして並外れた粋もうまれようが、ひつきよう、遊里のこの世ならぬ絢爛は、金銀の極度の遍在のうえにかろうじて成りたつ一つの作られた虚構の世界であった。

前述したように、もちろん、女郎にはランクがあり、銀の乏しい者は安い女郎で満足するしかないが、それに応じて絢爛の世界にもランク付けがあり、ここもかしこも、それぞれなりに一つの虚構の世界ができている。たしかに現実に地上にはそういう特殊な色街がつくられたが、あくまでそれは人工の約束の世界であり、その

いみでも廓（囲い込み）なのであった。[21]

だが、そういう囲い込まれた挾斜の巷での絢爛と虚構、そして粋は、美的ではあろうが、ふしぎにも日本で特殊な条件のもとでうまれた、人間にとっての倒錯なのではなかろうか。遊女たちは自由な女性ではなく、囲みのなかでひっきょう奴隷的な境遇を免れなかった。ともあれ、西鶴がその世界を主軸として人間の金と愛欲の世界を描いた好色物「草子」は、読み物として、当時の民衆のあいだに大いに受けいれられたのだった。かれがやがて早々とそれに見切りをつけて武家物、町人物の創造に向かったのも当然であろうが、そののちも、亜流の作家たちは好色本、春本を書きつづけ、出版社はそれを売りつづけたのであった。わたくしは、西鶴が、これら亜流の作家たちとはちがって、たんに興味本位にではなく、人間の愛欲を肯定する見地に一応立ってリアルな眼で深く遊里の実相をたしかな文体と筆力をもってみごとに描きだしながらも、しかもその世界に遊ぶものを結局たわけといい、その世界へのきびしい批判を寄せたことに留意しなければならないと思う。ともあれ、三都の、島原、新町、吉原を頂とする遊里は、幕藩封建体制のなかで、その政治的な配慮と監視を受けながら、[22]町人階級の繁栄のもとにはじめて咲くことができた文化の花、しかし、とても健全なものではありえず、反対に虚構にみちたしかも前近代的な徒花であった、とわたくしは思う。[23]たとえ、そのなかに人間のかずかずの喜びと悲しみ、誇りと哀れが織りなされていたとしても、そして西鶴がそこでの人間哀歓を描くことによって本格的な近世小説を創造することになったにしても、である。*

＊　明治、大正、昭和になっても、近代的な自由な人間を描き出そうとする文学にたいして、なお前近代的半封建的な情緒の温床ともなる、遊里に素材を求める作品が作られた。西鶴の『一代男』の名妓の三笠、夕霧、高橋を髣髴とさせる花魁佐太夫を描く尾崎紅葉の「伽羅枕」にたいして、北村透谷は次のように批判している。「佐太夫は天晴、粋の女王なり、然れども余は佐太夫を得て、明治文学の為に泣かざるを得ず。明治文学をして再び元禄文学の如くに、遊廓内の

理想に屈従せしむるの恥辱を受けしめんとするを悲しまざるを得ず」（『伽羅枕』及び『新葉末集』[24]）。わたくしは、若い頃透谷のこの批判をまだ読んでいなかったが、「遊里に通わなければ本物の作家にはなれない」などという趣旨の、当時著名な某作家（いまは残念ながらその名を忘れてしまったが）の一文を読んで、慨嘆したことを思いだす。わたくしはそのようなところに文学と思想上の理想をおいてはいなかったからである。[25]

2　銀（かね）が銀をためる世

大坂は幕府の直轄地であり、往時ここを中心として幕藩制的全国市場がめざましい発展をとげた。かつて蘆の名所として歌にもよまれた難波潟、難波江は、いまや「天下の町人」の活動する賑（にぎ）めく（古語）商業都市とはなった。「銀が銀をためる世」「銀が銀を儲くる世」とはいっても、むろん今日の高度に発展した資本主義国日本の状態と並べて単純に等置することはできない。* しかし、金融業のかなりの発展による商業のめざましい発展、それが、あたかも銀がそれ自身で銀をためるかのような仮象（シャイン）をもたらしてくる。その現実の姿を、だが俄成金とその没落、悲喜こもごものきびしい世の人間模様を、暗い裏面まで照射して、西鶴は活写した。そして一連の町人物、『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴置土産』『西鶴織留』などを生んだのである。

＊　この時期はしばしば近世（あるいは前期）資本主義とか近世商業資本主義、あるいは「すでに近代」云々などとよばれ、これによって当時すでに、商業中心とはいえ、資本主義社会ないし近代社会があるていど現出していたかのような表象までしばしばうみだされるが、わたくしはこうした見方には賛成しがたい。このような見方はW・ゾンバルトやM・ウェーバーらにあるといわれ、わが国でも、経済史家大塚久雄らをはじめ、[26]西鶴研究で著名な暉峻康隆らにもみられる。[27]あまり厳密に考えないで「資本主義」などというのであろうが、わたくしは社会構成史的視点をとりたい。資本主義というタームもたんに類比的に、あいまいに用いることには賛成しない。ついでにいえば、古代ローマなどにも資本主義という用語を用いる例がある。

① 町人のたくましいエネルギー

谷脇理史もいうように、『日本永代蔵』は「町人物の第一作として西鶴の一つの転換軸」であり、しかも町人の経済生活を描きあげたわが国最初の作品として文学史上画期的なものといえよう。『永代蔵』は「大福新長者教」という副題を伴っている。この名称には、寛永期の仮名草子『長者教』（教訓的な内容をもつ）の趣向を、新時代反映のかたちでうけつぐ「新長者」への町人の志向が表現されている。そのなかで巻五、六は教訓的な色彩が濃い反面、文学的な形象性に乏しく、多分これは先に粗く書かれて、のちに巻一から巻四が出来あがり、あとでそれに付け加えられ、一書を成したのであろう、といわれる。ともあれ、全体としてこの作品は、「『銀が銀をためる世の中』という現実の中で苦闘する様々の町人たちの姿を形象することに力を注いで[28]」成立したものと思われる。

(i) 新興商人の繁栄

新興商人を西鶴は「俄分限」、「成り上り」、「新長者」、「近代〔近頃〕の出来商人」などと呼ぶ。そして金銀の繁昌、金銀をめぐる様々の世情、新興商人の活動のさまを、各地での具体的な姿で生きいきと描きだす。盛んに人から人へと流通し、流動し、商人の腕しだいでいくらでも儲けられる銀、なかでも大坂の地、「諸国をめぐりけるに、今もまだかせいで見るべき所は大坂北浜、流れありく銀もありといへり」（巻一の三）と、全国一のその活況がまざまざと浮かんでくる。

巻一の四「昔は掛算今は当座銀」では、三井高利が新しい趣向で江戸に新店越後屋を開き（一六八三年、この店はのちの三越の前身である）、「万現金売りに掛値なし」を商売のモットーとして掲げ、大成功した様を描いている。この新商法は、これまでの公家・幕府と結びつく出入り商人による封建的な「掛け売り」を清算し、

民衆のために銀さえあれば何でも買えるという自由で便利な「当座銀」の方式を開拓したもので、まさに画期的なものであった。越後屋の亭主は「家職にかはってかしこし。大商人の手本なるべし」と、西鶴はほめる。つづいて、その店先を飾る品々の豊さに眼を見晴らせる。「いろは付けの〔いろは順で分類した〕引出しに、唐国・和朝〔中国・朝鮮などの外国や日本〕の絹布をたたみこみ、品々の時代絹〔室町時代の頃までに渡来した中国産の絹地の品々〕、〔さては〕中将姫の手織りの蚊屋、人丸〔柿本人麻呂〕の明石縮、阿弥陀の涎かけ、〔源氏の武将〕朝比奈が舞鶴〔紋〕の切、達磨大師の敷蒲団、〔中国宋代の隠士〕林和清が括頭巾、〔十一世紀の交、京〕三条小鍛冶が刀袋、何によらずないといふ物なし。万有帳〔なんでもある在庫品目帳簿〕めでたし。」さあさあ、御趣味の御仁、どなたでもおいでやす、大きに大きに、といった盛況である。かくて「古代にかはって人の風俗次第奢りになって、諸事その分際〔身の程〕よりは花麗を好み、ことに妻子の衣服、また上もなき事ども、身の程しらず、冥加〔神仏のお恵み〕おそろしき」と西鶴は書く。今をときめくめかした御令閨やお嬢さま方が珍しい衣装にわんさと群がり集まるさまは、今も昔もけだし同じこと。御婦人たちの高価で華麗なドレス愛好のゆえに、武家優位の封建制下では、延宝以来、天和・貞享と、あいついで町人の豪奢を抑える衣装法度が出されたのも、むべなるかなである。女房のために大きな身代を棒に振り、近松にもとりあげられた名にし負う大商人もいる。あな、怖ろし、怖ろしい哉。

(ii) 金銀が町人の氏系図

『日本永代蔵』には、町人にとっては家柄や血筋などが問題なのではなく、かわって、金銀こそがものをいう氏系図になる、という思想がはっきりと書かれている。巻六の五「智恵をはかる八十八の升掻」のなかで西鶴は次のように書く。「一切の人間、目あり鼻あり、手足もかはらず生れ付きて、貴人・高人、よろづの芸者

〔芸能者〕は格別〔として〕、常の町人、金銀の有徳〔金銀を豊富にもっている〕ゆゑ世上に名を知らるる事」、こうした事が世の習いであり、だからして「これを思へば、若き時よりかせぎして、分限のその名を世に残さぬは口惜し。俗姓・筋目〔素性や血統など〕にもかまはず、ただ金銀が町人の氏系図になるぞかし。」今でいえば、若いときから、金をもうけることを目的として、才覚を働らかせ、ときには手管を弄しても、巨万の富をかせぐように努力することの勧めとなろう。たとえば、大織冠藤原鎌足の血筋をひいていても、町屋住いをするしがない身となっては、貧乏であれば猿まわしの身にも劣るわけだ。とにかく人間、生まれたからには大福を願い、長者となることが肝要だ。大坂の港にも、江戸に送る酒を造りはじめて一門栄えている者（鴻池氏）もいるし、銅山に関係して俄分限になる者（住友氏）もいる。また、吉野漆屋を開いて人の知らないほどの大金をもうけた者もおれば、大坂から江戸に向う早舟（菱垣廻船のこと）を作って、舟問屋として名をあげた者もいる。そうかと思えば、家屋敷を質にとって銀を貸して金持になった者もおれば、鉄山の採掘を請け負って財を成した者もいる。「これらは近代〔近頃〕の出来商人、三十年このかたの仕出し〔一財産をきずいた成功者〕なり。」『永代蔵』の刊行が貞享五年（一六八八年）だから、三十年前の万治元年（一六五八年）以降、万治・寛文・延宝・天和を経て、貞享のこの年になるまで、大坂の経済の発展とともに新興の町人層が形成されたことを、西鶴はこのように述べ、人間と生まれたからには、才覚を巧みに働らかせば、名も世に知れわたる分限者となることができるぞと、人びとを励ましているようにうけとられる。

② 貧しき人々

銀が銀をもうける世を描く『日本永代蔵』には、しかし他方で民衆が、身に応じたささやかな商売をし、その日暮らしに辛うじて口を糊す有様が、あちこちに描かれている。『永代蔵』第二の二「怪我の冬神鳴」では、

船着場として商業で賑う町、大もうけしては遊女を呼んで昼夜の別なく遊興の華を咲かせる大津の色里。しかし、「金銀もある所には瓦石のごとし」。げに「身代ほど高下〔はげしい格差〕のある物はなし」と、嘆息をこめてわが身ひとつのしがなさ、貧しさを思い、肩の荷桶をおろして、うたた世の無常を観じずにはいられない醤油屋の喜平次の姿もある。

かつて伏見は、家康が在城していたころは、大名屋敷の御成門も金銀珠玉をちりばめていたが、その跡はいつか芋畑となり、あたりは昼でも蝙蝠が出てきそうな有様である。谷脇理史の現代語訳を借用すれば、一町の間に三か所ほど、ほそぼそとした暮しを立てている人がいても、蚊帳のない夏の夜、蒲団もない冬をやっとのことで送っている。伏見名物の葛籠や吹矢の細工人は、まだしも上流のほうだ。大方は取葺屋根の竹の輪を作ったり扇の要を刻んだり、灸箸〔灸をすえるとき艾を挟むのに使う箸〕を削ったり、荷縄をなって売ったりしてやっと暮らしているのだが、こんなささやかな商売では、とても細長い命をつなぐことはできまい。さいごに、原文の引用でこの節を結ぼう、「うき世に住むに哀れ多し」（巻三の三、「世は抜取りの観音の眼」）。

庶民は貧乏神に追いたてられ、「貧病」に苦しみ、たとえ来世には無間地獄に落ちることになろうともせめて現世ではわずかの仕合わせにあずかりたいと、無間の鐘を求めて（この鐘を撞くと現世では富裕になれるが、来世では無間地獄に落ちるといわれている）、遠江、佐夜の中山の観音寺を訪ねる人々の姿は当時絶えなかったという。

いや、『好色一代男』でも、憐れな夜鷹のことがしるされている（巻三の六）。世之介がまだ貧しくて放浪している頃の話である。以下、現代語訳（暉峻康隆）を再度拝借する。こんな商売をするのも皆食えないからで、小娘は親のため、または、自分の亭主を用心棒に引き連れ、わが子を母親に抱かせ、死ぬに死なれぬ命のため、こんなにあさましい世渡りをするとは、聞くほど不憫な世の中である。涙とともに雨の降る夜は、下駄・傘ま

でも損料で借りて稼ぎに出る。思えば仮（借）の世とはいいながら、裏店住いさえ一月と続かず、あそこへ隠れここに移り、その度に家請〔借家人の身元保証人〕の機嫌をとり、二合半酒で両隣を籠絡し、現金買いの薪で細々と立てる煙もやがては消える事だろう。夜鷹の輩は全くその日暮しで、月見も雪見も、盆も正月も知らずに終わるのだ。

もう一つ『永代蔵』から例をあげよう。京の名高い富商の伜が勘当されて、すべもなく江戸にくだる。一夜を明かそうと、北品川の東海寺の門前にゆくと、その片隅に薦をかぶってにわか乞食（今でいうホームレス）が寝ていたが、ねつかれず、世之介に身の上話を始める。江戸を頼りに出てきたのだが、ここも生活はきびしい。「この広き御城下なれども、日本のかしこき人の寄り合ひ、銭三文あだにはまうけさせず。ただ銀が銀をためる世の中」だ、という述懐である（巻二の四）。

『好色一代男』『日本永代蔵』にもこのような話がいろいろと出ている。紅燈のまぶしくあやしく揺らぐもとで、現実にどのような生活の貧困、悲惨、庶民の生活の暗さがうごめいているかを、西鶴はじっとみつめていた。このことを見れば、たとえば近年、牧野昇、金田雄次、大石慎二郎監修『大江戸万華鏡』（農山漁村文化協会、一九九一年）の描きだす大江戸繁栄の姿が、たしかに一面だけとりだせばそういうこともあろうが、全体としてはいかに事実をゆがめる結果になるかを、思わないわけにはいかない。また『歴史Eye』一九九二年五月号は、特集「西鶴の筆が踊る元禄ルネサンス」を組み、「士農工商の階級制度が崩壊した元禄時代」、万事金が解決する世の中、商人魂が勃然と湧き上がり絢爛と文化の花が開くと謳歌しているが、往時についての虚像を現代の読者に与えることになりはしまいか。

この貧困の面をさらにいえば、『世間胸算用』は、大晦日、中流以下の町人大衆の、資本をもたないがゆえに四苦八苦する年越しの苦労を描いたものであり、たしかに西鶴の人間をみつめる眼には、たんに暗さにのみ

のめりこまず、それを大観する姿勢も感じさせるものがあるが、しかし、何としてもかれらの生活はきびしいのである。「ことさら小家がちたる所〔小家が多い貧民窟〕では、喧嘩と洗濯と壁下地つづくる〔修繕する〕と、何もかも一度に取りまぜて、春の用意とて、いかな事、餅ひとつ小鰯一疋もなし。世にある人と見くらべて、浅ましく哀れなり」（巻一の二）。大晦日は「銭銀なくては越されざる冬と春との峠」。さては「今の商売の仕掛、世の偽りの問屋なり」（問屋の金儲けの仕掛けに偽りがいっぱいある）（巻一の二）。また、「『今の悲しさならば、たとえ後世は取りはづし〔来世の安楽はあきらめて〕、奈落へ沈むとも〔それでもかまわない〕、佐夜の中山にありし無間の鐘をつきてなりとも、先づこの世をたすかりたし。目前に福人は極楽、貧者は地獄、釜の下へ焼くものさえあらず。さても悲しき年のくれや』と、我と〔おのずと〕悪心発れば魂入れ替り、すこしまどろむうちに、黒白の鬼、車をとどろかし、あの世この世の堺を見せける〔生きながら地獄の怖ろしさを見せた〕」。あれもこれも「銀がかたき」だ。いまわたくしは文学的な内容にたちいる暇がないが、「小判は寝姿の夢」と題するこの巻三の三は佳作である。また巻五の三「平太郎殿」では、ある住職が「さても〳〵、身の貧からはさま〳〵悪心もおこるものぞかし。各もみな仏体なれども、是非もなき〔どうしようもない〕うき世ぞ」とつくづくと人間界の無常を思い託つのである。

③　庶民の恋愛、その真実

江戸時代、庶民は、男女の性愛をばできることなら遊里のなかに求めようと、だれもかれもこぞって、日々本気で考えていたわけではないとわたくしは思う。封建制のもとであり、たしかに身辺多くのしがらみはあっただろうけれども、愛する自由がことごとく奪われていたわけではないだろう（姦通にたいする律はきびしいが）。庶民のあいだにはひそかな逢瀬もあり、手紙も書かれもした。字の書けない者のなかにはたしかに代筆

をしてもらう者もいただろう。いや、そればかりではない。愛しあい信じあってよりそっている夫婦も少なからずいたはずである。男性がみな、遊里にゆきたいものと、毎日指をくわえていたわけでもあるまい。

『五人女』巻二の一「恋は泣輪の井戸替」の冒頭は「身はかぎりあり、恋はつきせず」と書き、巻三の一「姿の関守」でも、「神代の昔より、この事〔新年になっての男女の交情〕、恋知島〔せきれい〕の教へ、[29] 男女のいたづら止むことなし」とある。公娼、私娼こそが男性たちの真底からの夢であったなどとは、事柄のいちじるしい歪曲であり、狂態ではなかろうか――そういう巷があるから、好奇心もでてきたにしても、である。もし娼婦が、着飾っているか薄汚いか千差万別であれ、世の男性のつね日頃の憧れの的であったとするならば、市井で暮らす大多数の女性たちの心情はどのような悲惨なものであっただろうか。かの女らは蛻の殻と一緒に一生を送ることになるではないか。そんなことでは、貧しいながらも夫婦力を合わせて送る健気な生活は、基本的にありえないことになる。江戸時代、どれほど貧しくとも、賢くやさしく、気性のよい女性はたくさんにいたはずではないか。

ところで、『五人女』では、遊女ではない、地女、すなわち普通の家庭の女性たち、姫路のお夏、大坂のおせん、京のおさん、江戸のお七、薩摩のおまんらが登場する。なかでも、その巻一におけるお夏と清十郎、巻三におけるおさんと茂右衛門、かれらのあいだの、とくに女性たちの恋慕の激しさには、度をこすほどの自由奔放さがある。

また、町人物、その代表作の一つ『世間胸算用』をみれば、その主題は、前にもいったように、大晦日の借金の決済にからむ庶民（中流以下の商人）の行動、その哀歓を描くことにある。登場する人物はほとんど無名である。また、集団描写という手法を使って大衆を描いてもいる。大晦日を何とか乗りきるには、家庭における庶民夫婦の日常的な心情の通いが前提となるのはいうまでもない。なかでも、巻三の三「小判は寝姿の夢」

などは、極貧のなかでの夫婦の信頼と愛情がとくにきわだって描かれたものとして佳作である。

Ⅳ　西鶴の世界観・人生観

次に西鶴の作品のなかからその世界観と人生観をさぐることとしよう。もっとも、一般に文学作品のなかから筆者自身の思想をうかがうことには若干の制約があるのはいうまでもない。

1　唯物論的・無神論的思考

唯物論と無神論との両側面に分けて述べよう。

①　五輪の思想

『一代男』巻四の一で「世〔人のいのち〕は五つの借物、とりにきた閻魔（えんま）大王へ返さうまで」とある。密教では、空・風・火・水・地の五大を五輪ともいう。わたくしはかつて『日本思想史序説』で山上憶良をとりあげたさい、一切の物質の構成要素を地水火風の四大とみなすのは、インドではとくに最も徹底した唯物論派であるチャールヴァーカ＝ローカーヤタの基本思想であり、それは仏教、とくにアビダルマの四大説となった。そしてこれは仏教の唯物論的な側面をなすとし、憶良もまた生命をこのように考えていたであろう、と書いた。[30] そして密教では上記のように四大に空を加えて五大、すなわち五輪を構成要素として考える。密教はたしかに基本的には神秘主義的・観念論的な性格を強くもつが、その受けとり方如何によっては唯物論的な側面をも示しうるのである。生命をつくる物質構成については、日本の多くの知識人が密教を信奉していたかどうかは別として、このような側面をうけいれてきたように思われる。

西鶴も然りであろう。『日本永代蔵』巻一の一にも「ひそやかに思ふに、世にある程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つあり。それより外はなかりき」とある。谷脇理史は頭注で、ここでいう五つのものにかんして、野間光辰の異説もあるが、ここでは「地水火風空の五輪より成る人間の生命」[31]と解する方が無難とする。これが通説のようであり、わたくしもそれに従っておく。

これらのことから、わたくしは唯物論的傾向を、西鶴の思想の深部にみてよいだろうと思う。とくにこれに反するような主張はかれにみいだせないようである。

② 不信心

『日本永代蔵』の同じ巻一の一で西鶴は書く。「二月初午の日、泉州に立たせ給ふ水間寺の観音に、貴賤男女参詣でける。皆信心にはあらず、欲の道づれ」。守随憲治・大久保忠国はこれを「人間の真情を喝破した痛烈な言葉」[32]という。西鶴はつづいて書く。御本尊にしても、かれらの祈願に一々返事をしても仕方がない。だからこういうのだ。この世にぼろ儲けなどありはしない。そんなことは、わしに頼むまでもないことだ。百姓がおまえらの天職なのだ。夫は田を耕し、妻は機を織り、明け暮れは仕事に励むことだ。戸帳の向こうから、御本尊はこうお告げをするのだけれど、参詣人の耳にはいっこうに届かないようだ。また『好色五人女』巻一では、断食までして室の明神に清十郎の命乞いをしているお夏に、ある夜半、老翁が夢枕に現れ、さまざま勝手の願い事ばかりで、欲も深くて、聞いているとおかしいが、賽銭を投げてくれるのが嬉しくて、これが神の役目だと思って聞いているのじゃ、という。面白いし、西鶴が本当に明神を信じていれば、こんなことを書くはずがない。西鶴よりもかえって今の作家の方が、地蔵や薬師や不動、その他その他に霊験を求めて集まる庶民たちを意識してだろうか、こういう茶化しを書かないようだ。

守随・大久保は『胸算用』巻二の一の冒頭に着目する。「人の分限になる事、仕合せといふは言葉〔言葉だけのことにすぎない〕、まことは面々の智恵才覚を以てかせぎ出し、その家栄ゆる事ぞかし。これ〔金持になるのは〕福の神のえびす殿のままにもならぬ事なり」という文である。この文自体は、大黒を信仰する者の集まりである大黒講について書くための前置きにすぎないが、守随・大久保は次のようにいう。「こと神仏に関するとなると、〔西鶴は〕まず従来の御利益・霊験等の観念を否定し、反発してかゝりたくなるらしい。……この書起しは神〔えびす、七福神〕の否定であるばかりでなく、『仕合せ』*まで抹殺している。金持になるものは、実際は各人の智恵才覚によるのだ、運がいいというのは言葉の上でのことだ、というのである。[33]」

＊ 古代ギリシア・ローマ（ヘレニズム・ローマ期）に運が擬人化されて女神とされていたことをわたくしは想起する。ギリシアではテュケー（Τύχη）、ローマではフォルトゥーナ（Fortuna）が運の女神なのである（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、一九六〇年）の各項目を参照。

2　新興商人的思考

①　現世、すなわち商人的世界の肯定

上でみてきたように、西鶴の思想に新興商人的なものが貫いていたことは、かれが難波で町人としての経営活動を自分でもやり、のちに手代にその仕事をゆだねて作家活動に移ったその生活の有様からいっても、当然である。幕藩体制のもとで商業にかかわったかれゆえ、武家にかんしては作品を書くが、接触した経験の乏しい農民については何も書いていない。生産の基盤である農業には関心が乏しいのであろう（それにかれの生活基盤からいって作家として農民を描き出すには困難がある）。また、これがこの時代なのである。かれは寛文から、延宝・天和・貞享という江戸上方商業資本の成熟期に、ほかでもないその中心地大坂の商人社会で生涯

の最も充実した日々を送ったのであった。

金銀の流れる商業経済の世界に生きる人々を扱った『日本永代蔵』『世間胸算用』その他の町人物には、上述したように、いくたの成功、栄達の喜びとともにその蔭にひそむ失敗、没落の涙、さらに、ひどい貧富の格差のもとで辛うじてその日の口を糊する民衆の憐れな姿さえも描かれている。また金満家の美遊にたいしては「世界の偽かたまって」の言葉も残している。このように前近代性にどっぷりつかった現世にたいし、冷厳な眼をもってみつめながらも、かれは、それ以上には出ることなく、全体として肯定的な態度をとっていたといえよう。少くもそれを否定するとか、それにあえて抵抗するとかの視点はみられないといってよいだろう。『日本永代蔵』の結びにはじっさい次のようにも書かれている。「金銀ある所にはある物がたり、聞き伝へて日本大幅帳にしるし、末久しくこれを見る人のためにもなりぬべしと、永代蔵にをさまる〔収まる、このように〕して、時を得て世がよく治まる〕時津御国静かなり」（巻六の五）。「時津国」とは、『岩波・古語辞典』によれば、「四時順調によく治まっている国」とある。この江戸封建時代全体にたいする肯定的姿勢は、この著作の刊行後五年の後に没するまで、かれにおいて変らなかったということができよう。

② 町人的倫理——教訓

『日本永代蔵』に添えられた「大福新長者教」という副題が、教訓的なものであったかつての仮名草子の『長者教』を継承していることは、前述した。『永代蔵』のもつこの教訓的色彩は、その巻一の一の書き出しからもうかがえる。少し長いが、読んでおこう。「天道言はずして国土に恵みふかし。人は実あって偽りおほし〔誠実でありながら偽りを犯すことも多い〕。その心本〔もともと〕虚にして〔虚であって、いわばかけひきが多く〕物に応じて跡なし〔物の動きに応じて跡かたをそこに残すことがない〕。これ〔それというのも〕、善悪

の中〔ただ中〕に立ってすぐなる〔うちすぎてゆくまっすぐな〕今の御代をゆたかにわたるは、人の人たるがゆゑに〔人の中の人であるからこそできるのであって〕常の人にはあらず〔凡人にはそうそうできることではない〕。〔凡人にとっての〕一生の一大事身を過ぐるの業〔この世を何とか生きてゆくことが一大事なのであるから〕、士農工商の外、出家、神職にかぎらず〔だれしも〕、始末大明神の御託宣にまかせ〔倹約という大明神のお告げにおまかせし、とにかく節約をして〕〔大事な〕金銀を溜むべし。これ〔金銀こそが〕、二親の外に〔両親を別とすれば、じつに〕命の親なり。〔もっとも〕人間、長くみれば〔人生を長いと観じても〕朝をしらず、短くおもへば〔短いと思っても〕夕におどろく。」このように人生の長短にさまざまな感慨をよせながら、大切な金銀を溜めることに力を尽くし、生きてゆく術を考えようというのである。万人が金をためることができず、たくさんの落ちこぼれのいることを知りながらも、ここではとにかく、もうけることを勧めている。そして心すべき教訓として、まず、(i)いま述べたこと、すなわち、金銀を大切にし倹約をして家業にはげむ、(ii)健康に心がける、(iii)神仏をまつる（それが「和国の風俗」だからだ）、また(iv)分際をこえてはならぬ（町人の分際をこえた奢りは「天の咎」となる――西鶴は体制的に武士と町人との身分差を肯定している）、(v)人の道にはずれたことをしてはならぬ*、などを挙げている。

＊「いかに身過〔世渡り〕なればとて、人外なる〔人でなしの〕手業する事、〔そういうことをしては〕たま〳〵生を受けて世を送れるかひはなし。〔なにごとにせよ〕その身にそまりては、いかなる悪事も見えぬ〔みえなくなってしまう〕ものなり。いと口惜しき事なれば、世間にかはらぬ〔世間の普通のあり方とはかわることなく、つまり世間並みで〕世をわたるこそ人間なれ。これを思ふに、夢にして〔夢のようにはかない〕五十年の内外〔五十年前後の一生〕、何して暮せばとてなるまじき事にはあらず」。

結局、西鶴は、『日本永代蔵』の最後の節（巻六の五）では、一方で、金銀をたくさんもつことによって世

間に名も知られることになるので、とにかく大福を願って長者になることが肝要だとしながら（もっともだれしもそうなれるわけではないというきびしい現実がある）、他方で、大福長者になるよりも、分際相当に（「そなはりし人の身の程」にふさわしく）、世を渡ってゆく方がむしろまさっているという。これは矛盾であるが、かれはこれをこえることができない。そしてさいごに、同じ家に三代の夫婦が平凡ながら幸せな生活を送っているという話を一つの注目すべき例としてしるして、『日本永代蔵』全巻を閉じるのである。

3　人間の欲望の肯定

これについては二点がある。一つは大尽と遊女とのあいだの愛欲であり、もう一つは、庶民の生活における人間的欲望の肯定である。もっとも、二点とも、上述したことからほぼ明らかであろうと思われるので、簡単に言及するにとどめたい。

①　大尽と遊女

「世界の偽（うそ）かたまって、ひとつの美遊（びゆ）となれり。これをおもふに、眞言（まこと）をかたり揚屋に一日は暮しがたし」と序のなかで書かれている『西鶴置土産』でも、遊里における愛欲の肯定がみられる。たとえ遊里は偽（うそ）のかたまるところであるとしても、遊女を身請けして送る優雅な生活への批判はとくにみられないようである。次の一例をあげよう。巻四の二「大晦日（おほつごもり）の伊勢参りわら屋の琴」に、先代の吉野太夫を身請けしていた長崎のさる大尽の生活が出てくる（この吉野は、『好色一代男』巻五の一にでる吉野とは別の系統にぞくする）。「既に人間とうまれ、日本まれなる女郎をていけ（手活）にする〔わが物とする〕より外に、何〔の〕楽しみあるべし」とし、西鶴はその生活を次のように描いている。「月にも花にも吉野を詠（なが）め、あした（朝）夕の楽しみに、太夫が手づから

のせんじ茶をくませ、よろづに他の人をまぜず〔いつも水入らずで〕、碁相手・揚弓の友、暮には女鞠も色〔風情〕あり。風待つすずみ床に〔香ばしい〕名の木をかをらせば、初雪のあしたは歌に心をなし、世にある〔ほどの〕花車あそび〔風流遊び〕をつくし、雨の折ふしはほととぎすも鳴けかし、ほたるも数見る夜のなぐさみ、又ある時は、夫婦水菜〔そのおひたし〕などこしらへて、寝酒の種となす事、ひとしほ酔もおもしろかるべし」。まことに金に飽かせての結構な御身分である。ここにあるのは、遊里から出た女との風雅な快楽主義的な生活であるが、西鶴はべつにこれをとがめてもいないし、描くことを楽しんでいるようである。もちろんかれは他方で貧乏神に追ひたてられる生活を描くときには、あわれと思い胸を痛めているにしても、そこからさらに大きく問題をすすめて、この世に生きる万人が平等に物質的・精神的豊かさを享受すべきであり、どうしたらそれを実現しうるかという思想は、はるかに遠いのである。

② 庶民の生活における人間的欲望の肯定

いま述べたように、西鶴の場合、たしかに万人平等の思想にはほど遠いにしても、何も現に高級の遊里に足を運んで遊女を身請けした特定な者だけに特別に風雅な生活を送りうる素質が具わっていたというわけではなく、人間であればだれしも、条件さえ許せば、こうした生活を享受しうる可能性をもつことを否定してはいないのであろう。そのうえで、愛情にかんしていえば、とくに『好色五人女』に登場する五人の女たちは、いずれも遊里とは関係のない素人女で、恋の駆けひきも、媚びを売ることも知ることなく、日常の生活を送るなかでふとしたことから熱愛を傾ける異性とめぐりあったのである。その女たち、いったん恋（あるいは愛欲）にめざめれば、じつに自由奔放であり、たとえば巻二のおせんのごとき、貞女がにわかに――現代の文学にもしばしば登場する――かの「よろめき女」に化ける。[34] どんな貞女にも内心にあるひそかな性への欲求をかれはテー

マとして描いているのである。それをかれはことさらに隠散しようとは思わない。だがむしろこれは、自然界の、あるいみでの一つの摂理ではないのか。ドイツのショーペンハウエルは種の保存のために自然の用意した「餌（えさ）」という考えをさえ述べている――これに賛成するかどうかは別として。

ついに自害して果てたおせんの恋の末路を、西鶴は「あしき事はのがれず、あな恐ろしの世や」と結んでいる。そのいみではたしかにかれは、おせんの度外れたとみえる愛欲を是認してはいないようである。もっとも、ここでかれは、儒教的（朱子学的）封建道徳をもちだして裁いているわけではない。かれは朱子学的な道徳観、人間観には括（くく）りきれない当時の商人的な社会的モラルによって書いているのであろう。いいかえれば、社会のノーマルで健全なモラルによって考えているのである。このようにわたくしがいうのは、江戸時代も貞享・元禄期ともなれば、いわゆる理気二元論とその欲求抑制思想との浸透は一定の範囲においてはすすんでいたとはいえ、商業と人間の社会的活動のめざましい発展は、人間とその生活上の基本的な諸欲求、まずもって物質的諸欲求の肯定という思想を当然にもうみだしていたにちがいないからである。そもそもそのような諸欲求は、およそ人間の生存の基礎であるといえるのである。[35] 朱子学のいう理気の見地による、理のもとでの気質の従属、いいかえれば物欲の自立性の否定を説くことによっては抑えることのできない物質的生活肯定の思想が、正当にも抬頭してきているのであった。西鶴は、おさんの行動はゆきすぎであるとしながらも、前近代的思想の範囲内で庶民の物質的欲求をまず基本的に肯定する視点に立っていた。いつの時代にも、当然、それぞれの社会に適当するモラルというものは存在するのである。

（補　論）

西鶴とリアリズム

西鶴はしばしばリアリズムの作家として評価され、近代、あるいは近代への接近を、かれの作品のなかに読みとろうとの試みもみられる。そうしたさい、外国文学との比較ももちろん大切であり、わたくしも比較の視点を重視するが、かれの文学を、それをうみだした歴史、それが対象とした現実、すなわち遊廓と封建体制内での商人社会とから切り離して、近代に近づけ、近代文学の側に引きよせて捉えようとするのには、疑問を感ずる。何といっても西鶴は、江戸幕藩体制の前半期の作家である。中世封建制の再編である幕藩体制をかりに近代へ向かう過渡期的なものとして捉える視点をとるにしても、その時期は、ヨーロッパの絶対王政（イギリスのテューダー朝、フランスのブルボン朝など）とは異なる日本に特有なものであり、文学が一般にその対象と方法において時代的な制約を何らか免れないかぎり、西鶴の文学が、十七世紀から十八世紀始めにかけてのシェークスピアや、十八世紀フランスのヴォルテールらの文学と、根本において異なる社会的性格をもつのは、当然といえるであろう。

たとえば遊里。それは、前述したように、幕府体制の政治的な枠組のなかで意図的に作られた囲み込みの空間であり、太夫・天神といえどもまったく奴隷状態におかれたこの特殊な約束の場で、虚構的に美と粋の世界がくりひろげられたのであった。そのなかでは、多分、商人間の談合もあったであろうし、ことによると藩の財政たてなおしのための武士と商人との談合などもおこなわれたかもしれない。だが、西鶴は、そもそも遊里とはどのような性格のものとしてつくられたか、そして幕府権力と遊廓当主とはどのような関係にあったか

（九―一〇ページ参照）、また遊里のなかでおこなわれたかもしれない談合などの様子はどのようであったか、等々についてはなにも書きしるしていないようである。つまり、遊里での色ごと艶ごとを描きだしながら、そこでの政治的・刑事的・商業的等々の、重要な社会的な事柄は語らないのである。このドロップ・アウトはしかし小さな問題ではなく、リアリズムにとって痛手である。――このことは、『源氏物語』が、宮廷での政事の生なましい実態はもちろん、国内統治上におこる重要な諸問題、民衆への賦税、民衆の窮乏、浮浪、逃亡などの実態には関心を示さず、王宮内ではいつの時代でもおおむねそうだが、遊んでいても浪費するお金はざくざくとある場所での、源氏と女房たちとの色恋い沙汰、その細やかな心理的な描写に専念しているのと、そのかぎり、似たりよったりではなかろうか。[36]『源氏物語』はすぐれた女流文学であるが、式部のこの「文学的姿勢」、あえていえば、彼女の文学者としての視野の狭隘性が、のちの日本文学に小さくはない影響を与えたことも多言を要しまい（もちろん、先行者だけの問題ではなく、後継者自身の問題ではあるが）。とくに二十世紀末の今日のおどろくほど衰弱し荒廃した日本文学の現状では、まともな作家なら一行も書く気のおこらないような内容の作品が店頭に氾濫している。ともあれ、西鶴は、遊里での遊びを描いてはみたものの、結局、美遊も「たは（わ）け」、「闇にまよふもおろか」なこと、あるいはまた「偽のかたまり」と酷評せざるをえなかった。

そこでリアリズムの問題がでてくる。リアリズムは文芸上しばしば写実主義と訳され、あるがままに描くことと解される。しかし、あるがまま、微に入り細に亘り、実際どおりに描写したところで、一般にはそれだけでは決して芸術にはならないだろう。西鶴は、太夫や大尽の豪華美麗な衣装はもとより、遊廓の内情、さまざまな遊びの情景、また新町の大洪水や島原の盆踊なども『諸艶大鑑』などで事こまかに描いており、かれの物尽くしは堂に入っている（いや、十九世紀前半、フランスの批判的リアリズムの作家バルザックは、西鶴どこ

ろか、これでもかこれでもかといわんばかりに、情景などを微に入り細をうがって書き込んでいる）。これもたしかに文学者的資質にかかわることであろうが、もし作品が物尽くしにとどまるならば、むろんまだほんとうの芸術とはいえない。だからして、西鶴にしても、遊里のさまざまな場面での色恋いや憐れな情死の事件を扱うさいには、その事件の展開を文学的視点から再構成して描いている。実際にあった通りのことの記述に努めるのではなしに、かえってそのような構成を通して一つの世界を作りだすことによって現実の姿を芸術的によりよく反映するのである。

しかし、リアリズムは、ここからさらにすすむ。西洋古代美術史の創始者ヴィンケルマンは、「ギリシアの傑作に通有のすぐれた特徴は、姿勢と表出における高貴な簡素さと静かな偉大さである[37]」との有名な言葉を残したが、このような「高貴な簡素さと静かな偉大さ」は、現実の美しい人体の造型についてのかずかずの習練を重ねたうえで、その内的真実を把握することによってこそ達成される。それがリアリズムということである。これは造型美術にかんするが、文芸ではどうであろうか。同様である。いやゲーテもいうように、想像力、構想力はいっそう重要である。かれが『詩と真実』を書いた所以である。ここでリアリズムとは、様式としてのリアリズムをいうのではなく、創作方法としてのリアリズムを意味する。それは、人類の歴史に芸術が誕生してからこのかた創作の基本とされてきたのであろうが、芸術の発展とともにその内容はますます深められ、豊かになってきた。リアリズムは、事柄の本質、その内的真実を、その現象（個々の細部にわたる感性的な現われ）を描きだすことを通して、はじめて実現される。それは決してたんに事実を写しとることではない。たんに事実を写しても、事実を羅列しても、かえって真実を隠蔽することがしばしばあることに、深く思いをいたさなければならない。

このように考えると、西鶴のリアリズムの欠陥がめだってくる。かれは遊里を描いているが、さきに指摘し

たように遊里についての、社会性・政治性をも含めた真実を把握して――しかも未来をも展望して――描ききっているとはとてもいえない。かれはまた、『日本永代蔵』や『世間胸算用』で、商人の活動、とくに金銀の流通、金銀決済のための中小商人たちの難儀、蓄蔵と浪費、金銀ゆえの惚けた歓楽、またそれと裏腹の没落の悲哀を描いてはいる。たしかに金銀にまつわる諸問題を小説の素材としてとりあげたことでは、西鶴は西欧の作家たちによりも先んじているかもしれない。そこには、当時における「銀が銀をためる世」の繁昌の反映がみられる。『世間胸算用』における大晦日にかぎっての世相に着目したその着眼は、出色のものである。しかし、かれはバルザックのように、金銭が政治・権力・野心とからみあってもつ重要な問題性を洞察し、そのことをリアルに、粘っこく、しかも批判的に描くところまではすすんでおらず（バルザックの場合には、フランス革命を通過した社会情勢・社会思想がその背景をなしており、みごとな批判的リアリズムがある）、金銭の諸問題にいわば淡白にかかわるにとどまっているといえよう。

芸術上のリアリズムについての今日における到達点を次に簡単に述べよう。もっとも、わたくしはこの視点から西鶴を機械的に批判しようとは思っていない。そういうことは時代錯誤といえよう。前世紀、八〇年代にエンゲルスはハークネス宛の手紙で次のように書いている、「リアリズムというものは、私の考えでは、細部の真実さのほかに、典型的な状況における典型的な人物の忠実な再現をふくんでいます[38]」と。すなわち、リアリズムとは、現実の機械的な反映、つまりたんなる写実ということではなく、個々の細部の真実とともに、その個別的な感性的な表現のなかに現実についての普遍的な本質を、典型的な芸術的形象をとおして描きだす文学・芸術上の立場あるいは方法であるといえるだろう[39]。したがって、対象をたんにありのままに書き写すのではなく、創造的に、ときに虚構（fiction）をとおして、未来への展望をもって対象の内的真実を表出するのでなければならない。そのことによって観照するものに深い感動をよびおこすものでなければならない。

注

（1）本稿の執筆にあたっては、まずテキストとして、日本古典文学全集『井原西鶴集』(1)(2)(3)、小学館一九七一－七二年により、その解説、現代語訳と頭注にも多くを負うている。日本古典文学大系48、『西鶴集』上下、岩波書店も参考にした。著作としては片岡良一『井原西鶴』至文堂、一九二六年、近藤忠義『西鶴』日本評論社、一九三九年、野間光辰『西鶴年譜考証』中央公論社、一九五二年、中村幸彦『近世小説史の研究』桜楓社、一九六一年、守随憲治・大久保忠国『評釈日本永代蔵』、野田壽雄『近世文学の背景』塙書房、一九六四年、『西鶴』（新装版）一九七五年、三一書房、『近世小説史論考』塙書房、一九六一年、『近世初期小説論』笠間書房、『当世下手談義・教訓続下手談義』（校註）、桜楓社、一九六九年、『日本近世小説史・仮名草子編』勉励社、一九九五年、『日本近世小説史・井原西鶴篇』同社、一九九〇年、『日本・近世小説史・談義本篇』同社、一九九五年、暉峻康隆『西鶴――評論と研究』上、下、中央公論社、一九五三年、同『西鶴研究ノート』中央公論社、一九五三年、森銑三『井原西鶴』（新装版）、吉川弘文館、一九八五年、その他、『西鶴新展望』一九九三年、勉誠社などを参照した。――なお、野田『日本近世小説史』前掲二書からの引用のさいは、以下ではたんに『仮名草子篇』『井原西鶴篇』とする。

野田壽雄は、わたくしの北大赴任（一九五一年）以来五十年に垂んとする年上の知己であり、本稿では多くの恩恵を蒙っている。

（2）伊藤梅宇『見聞談叢』岩波文庫、一九六五年、二四三ページ。

（3）日本古典文学全集『井原西鶴集』(1)、一七ページ。

（4）森銑三、前掲書、二ページ以下。

（5）野田、前掲『井原西鶴篇』（注（1）を参照）、一六ページ以下を参照。

（6）同上書、二三ページ。

（7）森銑三、前掲書、一三四－五ページ。

（8）野田、前掲『井原西鶴篇』三八ページ。

（9）暉峻康隆、野間光辰編著『西鶴』三省堂、一九六四年、六九－七〇ページ。

（10）市古貞次『日本文学史概説』（三訂版）、秀英出版、一九八八年、一三一ページ。

（11）平賀源内『風流志道軒伝』日本古典文学大系55、岩波書店、一九六一年、二一五ページ。

(12) 野田、前掲『談義本篇』（注（1）を参照）、一六四ページ。
(13) 本節の記述は、同上書に多くを負う。
(14) 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会、一九九四年、三六ページ。
(15) 同上書、とくに四〇、六二－七一ページ。
(16) 同上書、六八ページ。
(17) 野田、前掲『西鶴』一九、二一ページ。
(18) 同上書、二六ページ。
(19) 同上書、二八ページ。
(20) 吉原、新吉原の実況については、たとえば、三谷一馬『江戸吉原図聚』立風書房、一九七七年などを参照。
(21) 本編のⅢ「西鶴文学の世界」の冒頭の箇所につけられた注＊（九－一〇ページ）を参照。
(22) 前注を参照。
(23) 宮地正人は前掲書の該当論文のなかで次のようにいう。「今日、従軍慰安婦問題が大きく取りあげられている。だが、この問題は近世初頭以来、権力が女性を消耗品的道具として都市空間の支配をおこなおうとした極めて明瞭な「政治」行為の「伝統」を認識しない限り、その本質を把えることは出来ないだろう。従軍慰安婦問題はその正に延長線上に位置づけられるのである。そして近世から戦前にわたる権力のこのような息のながい政治行為は、日本男性側の妻妾制の根深い容認志向や、女性に対し対等な人格を認めることの出来ない精神性の欠如（それは必ずしも前近代性と同義ではない）によって、保証され支援され続けてきた。しかしながら、人権や人格といった精神性が柔らかに衰弱化させられ、高度大衆消費経済のもと、消費者というカテゴリーでのみ無制約の「自由」が認められ、性の商品化が無限に展開する今日において、果して女性の性が今後二度と政治的に利用されないと誰が断言しうるであろうか？」（七〇ページ、――女性を商品化するだけの写真集が出版され、その作者を、某著名女優が新聞誌上で巨匠などとたたえている御時世である。この時世、若い女性たちも、慎みを忘れ去った放縦さから人間的な品位を回復するために努力しなければならないだろう）。
(24) 北村透谷『伽羅枕（きゃらまくら）』及び『新葉末集』、『北村透谷、山路愛山集』、現代日本文学大系6、築摩書房、一九六九年、七一ページ。

(25) 阿部次郎は『徳川時代の芸術と社会』（改造社、一九四八年）で次のようにいう。「吾々は、徳川時代の大部分を通じて〔江戸の〕芝居町と吉原町とは――これを全国的に見れば京の島原と大阪の新町とも亦――代表的悪所と考えられていたと見ることが出来る。当時の倫理的観念は表面上、この二つのものを悪所として併せて擯斥した。併し悪所として擯斥せられた劇場と遊廓こそ、正に徳川時代の平民文化を多産にし、特色づけ、流動発展せしめた二大源泉であったのである。若し劇場と遊廓とを、当時の観念のままに悪所であるとすれば、この時代の平民芸術は実際『悪の華』でなくて何であろう。」「『悪所』でなければその心の華を開かしめるに由ない人達がいた、その心に苔(つぼ)みを持ち始めたものを自由に咲き誇らしめるためには、悪所に奔る以外如何なる途をも塞がれてゐる人達がいた、約言すれば政治上社会上隷属の位置に甘んずべく定められた人達がいた。「悪所と、これを中心として発達せる徳川時代の平民芸術は、倫理的向上の意志ときり離された自由と、第一義の道徳とは別にその領土を開拓せる美との住むべき国であった」（四一、四二、四三ページ、傍点筆者）。西鶴の描きだす遊里の美と粋の世界が、浮世絵美人画と同様に、Anmutend（愉悦を与える、魅惑的）ではあるが、Erhebend する（心情を高める）の力を欠いているのは、ここにあるといえるだろう。

阿部はさらに次のように書く、「太夫の品格、太夫の芸能、太夫の色道の錬磨――こういうものは太夫買そのものに一種の面目、一種の晴れがましさを感じさせた。太夫の意地を張り、嫌な客をふるの自由――こういうことは太夫自身に、自分の権威を自覚せしめ、太夫に許される客に光栄と自惚とを感ぜしめた。……併し遊女が一度誠の恋に到達するとき、女奴隷であるという事実は千釣の重みをもって彼女にのしかかって来るであろう。たとえ多年の修練によってその許し方に心の厚薄の差別を見せる術を心得ているとはいえ、凡そ『勤め』そのものが彼女にとって堪え難い苦痛となることはいうまでもない。この意味において恋は遊廓と矛盾する」（一〇九ページ）。

(26) 堀江保蔵・角山栄編『一般経済史』（青林書院新社、一九七七年）中の角山栄「初期資本主義」と題する節には次のようにある、「ゾムバルトはその著『近代資本主義』において、「資本主義をその経済体制に従って三つの時代に区分し、それぞれ初期資本主義、高度資本主義、後期資本主義と名づけたのであるが、右に述べた封建制から資本制への過渡期がゾムバルトのいう初期資本主義時代にあたる。この時代の特徴は商業資本の主導のもとで国内市場並びに海外市場が拡大し、それに伴って商業・金融業の規模と組織がいちじるしく発展したことである。だからこの時代は、商業資本主義の名前でよばれることもある」（六〇ページ）。

(27) たとえば暉峻康隆はいう、「〔河村瑞軒による〕東西航路の開設によって、伸び悩んでいた上方の商業資本は、一時に全国的な規模を擁することになり、早期資本主義時代への第一歩をふみ出したのである。」「元禄元（一六八八）年刊の『日本永代蔵』の最終章で、西鶴が指摘しているように、商業資本主義への第一歩をふみ出した寛文以降、権力に依存しない実業家タイプの新興町人が台頭し、元禄文芸復興の新たなエネルギー源となったのである」（前掲、日本古典文学全集『井原西鶴集』(1)、六、七ページ。）

(28) 同上『井原西鶴集』(3)、二四－八ページ。

(29) 恋知り鳥は恋教え鳥ともいい、せきれいの異名。神話で、イザナギとイザナミの二神に男女の交わりの道を教えたとされる。

(30) 拙著『日本思想史序説』新日本出版社、一九九一年、七五ページ。

(31) 前掲『井原西鶴集』(3)、九一－二ページ。野間光辰の説は、岩波書店版の、前掲『西鶴集』下にある。ここで「五」という数字にはとくに根拠はなく、「一部分保留」の意味でいったのであり、強いて何が五つかといえば、生・老・病・死・政治的権力であろう、とある（四六五ページ）。

(32) 守随・大久保、前掲書、二九ページ。

(33) 同上書、一六二ページ。

(34) 野田、前掲『井原西鶴篇』二三一－二ページ。

(35) マルクス・エンゲルスは次のようにいう、「生きるために必要なのは、とりわけ飲食、住居、衣服、そしてその他のいくつかのものである。したがって、第一の歴史的行為は、これらの欲求を充足するための諸手段の産出、物質的生活そのものの生産であり、しかも、これは、人間を生かしておくだけのためにも数千年前と同様に今日もなお日々刻々はたされなければならない歴史的行為、すべての歴史の根本条件である」（『ドイツ・イデオロギー』服部文男監訳、新日本出版社、一九九六年、三五ページ）。

(36) 阿部次郎は書く、「性欲生活の中に複雑な情味や、わけ知りの矜持や、物の哀れや、気品々格をさえ求めようとする欲求の旺んな点において、徳川時代の平民は、平安期の貴族の――源氏物語によって代表せられる平安期の貴族の――正系である。そうして遊廓はこのような色道修業の根本道場として、正に中世の貴族の邸宅と別業〔別宅〕とを世話に砕いて代表したものと云うことが出来るであろう。……徳川時代の遊廓は、六条御息所の後身を其処に収容しう

る〔柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』で六条御息所が年増の遊女に置きかえられていることを指す〕ところに、文化的生産力の胚種を含んでいる」（四五ページ）。

(37) Winckelmann, Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst, Reclam, 1969, S.20.

(38) エンゲルスのマーガレット・ハークネスへの手紙、『マルクス・エンゲルス、芸術・文学論』第一巻、「基礎理論」大月書店、一九七四年、一四五ページ。

(39) 『社会科学総合辞典』新日本出版社、一九九二年、六六八ページ。